

「公

子連れの父母たち以外にも、「未来に対しては不安だけれど幸せ」とレットレルを貼られてきた若者たち、壮年層も多く参加している。みな政治には受け身と

時の回廊



鬼とは何か。古代、中世の説話や能に鬼の系譜をたどり、歴史の暗部で滅んでいった人々の姿を浮かび上がらせた『鬼の研究』（ちくま文庫）は、1971年に刊行されてブームとなり、いまや古典と呼ばれる。筆者は当時43歳の高校教師。現代歌壇を代表する存在となっていくのは、この後のことだ。名作はいかにして生まれたか。

それはもう、運命としかいいようがありません。

50年代半ばからの前衛短歌運動に変わり、60年安保闘争では教職員組合の婦人部長でデモにも行きました。だれもが政治を語った時代でした。それが

馬場あき子「鬼の研究」

苦悶の姿を安保に重ね



郭允撮影

ばば・あきこ 1928年東京生まれ。短歌結社「かりん」主宰。朝日新聞歌壇選者。86年「葡萄唐草」で迢空賞、2000年朝日賞を受賞。『馬場あき子全集』など著書多数。

過ぎ去った後、私は自分を見失い、歌人としても行き詰まっていた。中学校から都立定時制高校勤務になつていました。昼間は、近所の主婦たちと源氏を読んだり、図書館で、中世初頭の公家の日記や史書などを読みあさってノートを取ったり、好きな古典の世界にのめりこみました。

19歳から能をやっていたので、小さな演劇集団の役者たちに舞を教えるう

過ぎ去った後、私は自分を見失い、歌人として行き詰まっていた。中学校から都立定時制高校勤務になつていました。昼間は、近所の主婦たちと源氏を読んだり、図書館で、中世初頭の公家の日記や史書などを読みあさってノートを取ったり、好きな古典の世界にのめりこみました。

ち、一人の女が心の闇ゆえに鬼となる戯曲「般若由来記」を書きました。その芝居を見た編集者から、突然、電話が来たのです。「あなたなら式子内親王が書ける」と。

〈玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする〉。この歌で知られる式子内親王は、後白河天皇の皇女で、平氏打倒の兵を挙げて敗死した以仁王のきょうだいです。最初

なぜ人びとは自発的な参加をし始めたのか。それは、昨年3月11日の震災と原発事故後、日本のわたしたちがみな否応なく「当事者」にさせられてしまっ

催された。この怒りを保ち表明し続けることが出来れば、今後

いままのデモには、かつてのデ

けるデモや抗議行動な「公共空間の政治」本中のどこかで出現だから、行かないまはもったいない。

に頼まれたテーマは「以仁王と式子内親王」でした。ぴんときました。編集者は私の般若を見ながら以仁王の乱を思い、そこに安保を重ねたのだと。

動乱の時代に女たちがどう生きたかは私にとっても切実なテーマでした。そしてまったく偶然に、私の手元には執筆に必要なノートがあったのです。

3カ月で一氣に書き上げました。69年3月に出た『式子内親王』は式子の全体像を描いた初めての論といわれ、反響を呼びました。

次に取りかかったのが『鬼の研究』でした。能の根源について考えていましたから、迷わず女の次は鬼だと思いました。

『今昔物語』などの説話や伝説、能の鬼をうわーっと集めました。大江山の酒吞童子や鈴鹿山の鬼伝説には、朝廷に抵抗した者たちの影があり、藤原摂関政治の全盛期こそ、鬼が最も都に跳梁した時代でした。鬼とは人でした。王朝の繁栄の陰で破滅し、暗黒部でしぶとく生きた人間たちの意志や姿なのです。

70年安保前夜でした。60年安保の時

に中学生だった教え子たちが学生になっていて、学生運動が分裂し暴力が始まり、ぼろぼろになっていった。責任を感じながら何もしてやれない。彼らの敗北を見ながらの執筆でした。

あとがきに「鬼はしだいかの怪異な容貌を解体しはじめ、苛酷な状況を告発しつつ生きる人々の苦悩の表情をとりつつあるのを否めない」と記したのは、彼らのことでもありました。

71年6月に刊行され、前作以上に高い評価を受けました。電話がひっきりなしにかかり、自宅に鬼を名乗る青年が訪ねてきたこともありました。

勢いに乗って僧を書き、能を書きました。歌も変わりました。50歳を前に教師を辞め、歌人として書いていくと決めた翌年、歌集『桜花伝承』で現代短歌女流賞を受賞、朝日歌壇選者になり、歌誌「かりん」を創刊しました。

私の最大の転機となった『鬼の研究』は、今月発行の『民衆史の遺産』（第2巻「鬼」）に全文収録されました。読み継がれているのはうれしいことです。

(聞き手・伊佐恭子)